

「菊池寛の人生観と小説」

高松市立玉藻中学校 三年 梁野 真由香

私はドキリとした。なぜなら作品の冒頭に、「僕は先ず、「二十五歳未満の者、小説を書くべからず」という規則を拵^{こしら}えたい。」とあるからだ。私は、小学生の頃に小説を書いていたことを思い出した。なぜ菊池寛が規則を作りたいと思ったのか気になった。

『小説家たらんとする青年に与う』は一九二三年に書かれた作品だ。文庫本で六ページの文章の中に、小説を書くとはどういうことか、菊池寛の意見が綴られている。私は、「小説を書くということは、決して紙に向かって筆を動かすことではない。吾々の平生^{へいぜい}の生活が、それぞれ小説を書いているということになり、また、その中で、小説を作っているべき筈^{はず}だ。」という部分が気に入った。人生派と呼ばれた菊池寛らしい、親しみやすく人間味のある表現だと感じた。

小説を書くのに必要なのは、テクニクや発想力ではなく「技巧の中に匿^{かく}された人生観」だと菊池寛は書いている。人生の目的や価値を表現できるくらい経験を積むまでは、小説を書いても遊びにしかないということだと思う。もし小学生のころの私が読んでいたら、小説を書くのをやめていたかもしれない。

『小説家たらんとする青年に与う』を読んで、自分が小説を書いていたときを思い出した。私は小学五年生の春、「小説を書いてみよう！」と思い立った。なぜか急に、小説って読むだけじゃなくて書いてもいいんだ、と気付いて、世界が広がった気がした。プロット作りも、構成を組み立てることも知らなかったから、キャラクターの名前とあらすじを大まかに決めて書いた。五ミリ方眼のノートに好きなだけ書いて、物語の世界を作っていけるのが楽しくてたまらなかった。昼休みも書いていたら、クラスの友達に「何してるの？」と聞かれた。「小説を書いているんだ」と答えたら、「ええー！」と驚かれて、私までびっくりした。友達を読んでみたいと言ってくれたから、二章まで書いたら読んでもらう約束をした。

私が初めて書いた小説は、中世ヨーロッパの国の王子と王女の悲恋物語だった。約束通り読んでくれた友達は「おもしろい！」と褒めてくれた。「続きも書いて」と言われて、私は張り切ってたくさん書いた。ふたりでペンネームをつけたり、誤字脱字を見つけては、大笑いしながら訂正した。登場人物の裏設定を考えたりした。今読み返したら、登場人物の名前が別人になっている部分があるし、全員話し方が古風だし、拙かった。でも、誰かに読んでもらえるのはとても幸せなことだと気付いた。小説は、書き手と読み手が揃って成り立つんだと感じた。

第二作は私立高校が舞台の学園ファンタジーだった。書いている間、ずっと楽しくて完結まで書き切ることができた。ノートでは足りなくなつて、原稿用紙に書いた。話を膨らませるのが楽しくて、何枚書いても苦にならなかった。四百字詰め原稿用紙五十四枚で完結した。完成した原稿は、小学生向けの文学賞に応募した。一次選考は通過したけれど、二次選考で落選だった。悔しかったが、いい思い出になった。

菊池寛は「尤も、遊戯として、文芸に親しむ人や、或は又、趣味として、これを愛する人達は、よし十七八で小説を書こうが、二十歳で創作をしようが、それはその人の勝手である。」と書いている。

私は趣味として小説を書いたからセーフだ。良かった、と胸をなで下ろした。中学生になったタイミングで書くのが止まった。日々の宿題やテスト勉強に追われるうちに、小説の存在が少しずつ頭から離れていった。菊池寛の作品を読んだら、久しぶりにまた何か書きたくなってきた。

文中に「僕なんかも、始めて小説というものを書いたのは、二十八の年だ。」とある。気になって調べてみた。すると、菊池寛が初めて本名で発表した作品は、新思潮に書いた戯曲『屋上の狂人』と、『身投げ救助業』で、どちらも二十八歳だったと分かった。

菊池寛は二十八歳になるまで、どんな文章トレーニングをしていたのか興味を持って、『半自叙伝』も読んだ。高等小学校三年の頃から、「日記帳のような習作帳のようなものを書いていた」らしい。習作帳は「半紙を綴じたもので十三四冊に達し」たそうだ。当時の菊池寛と同じくらいの年齢で、私も同じように五ミリ方眼のノートに書いていたと思うと、嬉しくて親近感が湧いてきた。

経験を積んだ人にしか書けない小説は、きっとある。『身投げ救助業』は、二十八歳の作家が書いたとは思えない、重い題材だった。小説には正解が存在しない。難しいし、奥が深い。だからこそ、小説はおもしろい。

今は「二十五歳未満」でも小説家への足掛かりをつかめると思う。投稿サイトから本になった小説や、学生向けの文学賞からデビューした作家さんも知っている。

「小説家」になるために、菊池寛は人生観や人生経験を重んじている。私には、まだ答えが分からない。菊池寛は「吾々の平生の生活」が小説を作っていると書いているから、私も毎日の生活を大切にしたい。そして、これからも小説を読んで、時々書いて、自分なりの答えを見つけない。

菊池寛『半自叙伝』 講談社学術文庫

「小説家たらんとする青年に与う」